



Veritas No.40(2009.3.17)

目次 (敬称略)

<「本の旅路」—特集に寄せて—>

真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 本の旅路>

立石 浩一 (英文学科)

石川 康宏 (総合文化学科)

岡田 将 (音楽学科)

水本 誠一 (心理・行動科学科)

片木 華枝 (文学研究科)

谷口 佳恵子 (文学研究科)

井原 麗奈 (文学研究科)

<研究室から>

難波江 和英

<史料室から>

佐伯 裕加恵

<視聴覚センター近況報告>

林 裕市郎

無断転載を禁ず

＜「本の旅路」―特集に寄せて―＞

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

「卒業・入学」シーズンを迎え、「旅」にまつわる特集をお届けする。社会人としてキャンパスを「旅立つ学生」たち、そして4月に岡田山に登る新入生たち。時代はさまざまに移り変わっても、春のキャンパス風景はあまり変わらない。

「学びの成長」を真に願うなら、学生を甘やかさないで、世の中のつらさを経験させたほうがよい。「可愛い子には旅をさせよ」と言われるように、人は旅を通じて成長するからだ。日本列島を広く旅し、独自の学問を開拓した民俗学者の柳田国男は、「良い旅というもの、良い読書と同じである」と述べている。

「人生の旅路」が生み出す無数の経験は、やがて積み重なり、国民的規模での「歴史」をつくる。2009年1月20日、オバマ大統領の就任演説が世界中に放映された。日本時間の真夜中に「生中継」されたその演説を私もテレビで見たが、アメリカ合衆国の歴史を「旅」にたとえた一節がとりわけ印象深かった。大統領は、国民に向かって次のように語りかけたのである。

わが国の偉大さを再確認するにあたって、偉大さとは決して与えられたものではないことを忘れてはなりません。それは自分の手で獲得するものでなければならないのです。私たちの旅は、近道でも安易なものでもありません。道を歩む旅人は、意気地無しではありませんでした。仕事より娯楽を好み、富や名声を追い求めることしか考えないような人たちとは違います。むしろ、リスクを進んで引き受ける人、実行力のある人、物事を作り上げていく人たちでした。なかには有名人もいますが、大多数は男女を問わず無名の労働者たちです。そうした人たちが長いいばらの道を黙々と歩み、繁栄と自由という目的地に向かって我々を導いてくれたのです。

そうした人たちが、我々のためにわずかな持ち物をまとめ、新しい生活を求めて海の向こうへと旅立ったのです。

この演説は、「いばらの道」に挫けず、勇気をもって歴史を切り開いたフロンティア精神を鼓舞する。世界のトップリーダーたるにふさわしい勇気を感じさせる。「新天地アメリカ」をめざして海を越えた「移民」たちの中には、もちろん「日系移民」も含まれる。白人・黒人・黄色人種といった肌の色や男女の性別を問わず、世界中からやって来た多くの労働者たちの汗と労苦なしには、アメリカの繁栄と自由は達成できなかった。

21世紀の今日、世界情勢は混迷を深め、経済不況・戦争・貧困・環境破壊など多くの困難な問題に直面している。そのような時代にこそ、歴史の記憶に刻まれた「苦難の旅路」を思い起こし、未来への道筋を照らす「希望の灯」を見出したい。

<特集 本の旅路>

立石 浩一 英文学科教授

「実は私は...」

「鉄っちゃん」だったのですよ。それも車体には興味が無く、駅・バス停留所・路線図などに、異常に興味を示していたのですね。外に出るのが大嫌いで、でも1968年の日本の県別の牛蒡の生産高については異常によく知っている、妄想で旅をする子供だったのですね。それは今でも全く変わらず、Armchair Traveler を続けているわけで...

『日本の島ガイド SHIMADAS』（財）日本離島センター（私が持っているのは2005年版第2版）という本があります。名前の通り、日本の離島（何をもって離島とするか日本は非常に分かりにくいですが）の事細かなガイドでございます。例えば、姫路の南の家島群島に、太島（ふとんじま）という、企業がサバイバル研修に使用する無人島があるのをご存知ですか。こういうどうでもいい情報を蒐集する癖が、現在の私のルーツなのでありまして。いきなり口琴やテルミンを大人買いするとか。治りませんね。

さらに、実は私は、折り紙を折る事が得意でして（えーっ？）、折り紙でも旅をすることは可能です。例えば、Nicolas Terry 『Licence to Fold (Permis de plier)』（2008, SARL Passion Origami, ISBN 2-84424-062-3）などは、世界の作家性の高い折り紙創作家達の作品の折り方を解説した本ですが、作品を提供している創作家19人の中に、日本人は1人しかおりません。ベトナム人が3人居ますが、アジアからはそれだけ、後はアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの創作家ばかりです。こんな物を見る事で、日本文化としての折り紙なんて、折り紙という世界から見るとごく一部でしかないことが分かり、我々は、各国の作家の作風を通して旅をすることができるのです。

最後に、実は私は言語学者です（信じられない！）。定番ですが、David Crystal 『English as a Global Language』（2003 第2版, Cambridge University Press）などを見ますと、英語と言う、ケルト語・スカンジナビア諸語・フランス語・ラテン語の混成による、発音から文法から異常に面倒くさい言語が、なぜ不幸な事に世界の共通語になってしまったのか、そのつけは誰がいつ払うのか、シンガポールであれほど Singlish と呼ばれる地元の英語方言を矯正しようとして失敗をなぜ続けているのか、英語の未来はどうなるのか、など、「言語の旅」を実感することが出来ますよ。

以上、妄想の旅のすすめでございました。多様性だけはおかげで誰にも負けません。



Bébé Dragon

(Daniela Carboni(イタリア)、折り手 立石、Terry 氏の本に所載)

石川 康宏 総合文化学科教授

「いいよなあ 旅」

講演仕事で、あちこち出かけることが多くなり、今年に入ってから岩手、岐阜、島根、埼玉などといったところへ出かけています。しかし、残念ながら、いずれも「旅」の楽しさを感じさせるものではありません。行って、講演をして、帰ってくる。ただそれだけの「移動」の時間といった感じです。加えて、岩手や島根は往復飛行機で、交通時間も実に短いものとなっています。電車や飛行機で本を読んではいるものの、自宅から大学に通う電車でのそれと何も実感はわかりません。

それでも2年ほど前までならば、行く先々の土地に関する本を読んで行こうと思える心のゆとりがありました。山川出版社から出ている『県史』(全47巻)をしばらく読んでいたのもその頃です。北は『北海道の歴史』(田端・船津・桑原・関口、2000年)から南は『沖縄の歴史』(安里・高良・田名・豊見山・真栄平、2004年)まで、行き先に応じてその土地の本を手にして出かけました。原始・古代から現代まで、地域の通史が要領よくまとめられており、地理や文化や産業、政治や他の地域との交流の様子なども良く見えます。旅先を歩く時に「自分はこういう歴史の上を歩いているんだな」と、なんだか少しテンションが高くなることもありました。

何年かつづけて家族でインドネシアのバリ島へ行っていたこともありましたが、その時にも、関係する地理や歴史の本をいくつか読んで行きました。覚えているのは、村井・佐伯『インドネシアを知るための50章』（明石書店、2004年）や歴史教育者協議会『シリーズ知っておきたい東南アジアⅠ・Ⅱ』（青木書店、2004年）などです。ただし、こちらは実際の歴史の複雑さに、アタマの整理がついていきませんでした。付け焼き刃の限界ということだったのでしょう。

韓国へは2004年から毎年ゼミで行っていますが、こちらは完全に仕事です。ゼミは「慰安婦」問題をテーマにしており、学びの中には、韓国の近現代史や日本と朝鮮半島と交流の歴史などもふくまれます。長い歴史をザッとながめるには三橋広夫『これならわかる韓国・朝鮮の歴史Q&A』（大月書店、2002年）が便利です。最近の政治の急速な変化の内実を知るには面川誠『変わる韓国』（新日本出版社、2004年）が面白いです。どちらを読んでも「こんなに近い国なのに、知らないことが多いなあ」と思われます。

どうも、どこまで書いても、あまり旅らしい旅の本は出てきそうもありません。旅先で眠る前には、椎名誠、東海林さだおのオモシロ本や、小池真理子のホラー小説なんかも読んだりしてはいるのですが。

学生たちの大学からの「旅立ち」といった言葉に無理やりひっかけることで、そろそろ終わりにしたいと思います。この3月に『輝いてはたらかないアナタへ』（冬弓舎、2009年）を、総合文化学科叢書の一冊として出版します。08年3月に卒業したゼミ生たちと一緒につくったもので、メインとなるのは、すでに社会ではたらいっている若い先輩たちの体験です。4月から就職するみなさんにも、これから就職を考えるみなさんにも、大いに参考になるものと思います。ぜひページをめくってみてください。

最後は自分たちの本の宣伝で終わってしまいました。まあ、そういうこともあるわけです。はい、では、おしまいです。

岡田 将 音楽学科専任講師

●ピーターJ. ダダモ著, 濱田陽子訳『ダダモ博士の血液型健康ダイエット』

集英社 1998年5月

今回のテーマは旅ということですが、旅といえば食！旅先にはどんなおいしい料理があるのかなと一番に考えてしまう僕は食べることが何よりも大好きで、遠出するときも近場の移動のときも必ず何かしらリュックに口に入れるものをこしらえている。というわけで（笑）旅と食を無理やりくっつけて今回ご紹介させていただくのは、『血液型健康ダイエット』という本です。

血液型によって体質を分けて、かかりやすい病気などを例に挙げ、健康を助ける食品、または避けたほうが良い食品などが沢山記されています。もともと著者は病気を薬ではなく食事療法で治療するという考えを医療に取り込み実際にこの食事療法で改善された病気も沢山あるみたいです。中身を読んでみると、自分でもなんとなく無意識に、これ食べると少し胃がもたれるな、なんて思ってたものは、それ自体が健康的な食材であっても摂取を控えたほうが良い食品のリストの中に書いてあったりして、なんとなく納得させられました。そのリストの中にはとんでもない、今まで聞いたことも無いような生き物の名前まで書いてありますから、少し笑える本でもあります。

この本とは関連性はないかもしれませんが、ピアノの演奏会なんてものは15分の休憩挟んで約1時間40分くらいかかるもので、精神力、体力を要します。いかにしてスタミナを持たせるかは経験上やはり食事にあるように思います。前日に食べるもの、当日の朝に食べるもの、演奏会前に食べるもの、また開演の何時間前に食事を取るかによっても集中の度合いだったり、持続性だったりが大きく変化します。ちなみにテニスの選手が途中で栄養補給にバナナ食べてるじゃないですか？試したところ、体内吸収は早いものの20分そこらしか持ちませんでした。持続性が一番高かったのは、なんとお米でした。余談になってしまいましたが、気分転換に是非読んでみてください。

水本 誠一 心理・行動科学科准教授

「こころの旅」

2004年6月、20年来の古き友らと旅にでかけた。それはスペインへの音楽の旅。その年バルセロナでは「Forum2004」と題し、異文化交流をテーマにしたさまざまな文化的企画が持たれていた。その一つとして現地のキリスト教と日本の宗教(真言宗/須磨寺・南蔵院)との交流が企画され、それは6月12日サグラダ・ファミリア教会礼拝堂において合同ミサという形で実現した。サグラダ・ファミリア教会といえばアントニ・ガウディによる設計で世界的に有名であるが、1882年に建築が始まって以来今日もなおその建築が続いていることでも有名である。その教会で海を越え宗派を超えた合同ミサが執り行われることは異例なことであった。しかしさらに特別であったこと、それはそこに私たちがいたことかも知れない。2001.9.11 アメリカ同時多発テロの影響により日本からの同行取材は直前になって中止されたが、現地テレビ局の協力によりその様子は日本でも紹介された。世界中がテロの不安に怯えていた当時、私たちは合同ミサに先だって‘世界平和’を祈念しコンサートをさせていただいた。ミサ曲以外の演奏が許されたのは初めてだったようであるが、礼拝堂に響き渡る心地よい重奏な音色は友たちの心のハーモニーであり、世界中の人たちの平和を願う心の重なりであったと、今でも思う。



音楽の旅で最もうれしいことは多くの人たちとの出会いであり、そこから始まる心の交流である。サグラダ・ファミリア教会ではボネット神父さまとの出会いがあった。さらに神父さまがかつて施設で一緒に過ごされた知的障がいのある青年ジョアンとの出会いも生まれた。そしてミサに集められた多くの人たちとの出会いが生まれた。また日本人彫刻家でサグラダ・ファミリア教会主任彫刻家の外尾悦郎氏との出会いもいただいた。帰国前夜に催していただいたフェアウェルパーティーでは、外尾氏から一人ひとりにそっと手渡された贈り物があった。あなたたちに持っていてほしい。それは建築中のサグラダ・ファミリア教会で天空に向かって神に差しだされているフルーツバスケットに使われたヴェネツ

ィアガラス。とても大きな色とりどりのガラスを、一人ひとりのために小さく加工していただいたものだった。



友らはダウン症や自閉的傾向などにより知的な能力にそれぞれのハンディーをもって
いるが、その心にハンディーはない。人の歩みをそっと待ち、人の喜びを自分の喜びとし
てとらえ、そして自分自身を大切にすることを教えてくれる彼らの音楽メッセージは、い
つしか多くの人たちの心をとらえるようになり、開いたコンサートは200回、出会いは延
べ15万人を超えた。著書『あぶあぶあからの風』は、著者自身が彼らとともに歩んできた
ところの旅を綴った一冊の本である。

●著者：ひがしの ようこ

写真：東野 雅夫

タイトル：あぶあぶあからの風

出版社：築地書館（2009/01/25 出版）

片木 華枝 文学研究科比較文化学専攻

「時を旅する」

「旅」は豊かな彩を持つ言葉だと感じる事がある。実際に列車や飛行機に乗り込み何処
か遠くへ出掛けていく空間的な行程も旅、書物の中に深く入り込む時間的な行程もまた旅、
時には生きる道そのものも旅に例えられる。

たった一語で様々なものを喚起する旅ではあるが、そこに何か共通するものはないかと

考えた時、自分にとってのそれは次のようなものである事に気付いた。

即ち、一見日常から切り離された時空間へ自分の身を置く事により、普段は閉ざしている感覚が一気に開放され、自分自身が洗い直されるような体験をする事、そしてそこから新しく日常と向き合う一連の過程、それが旅ではないか、と。

森下典子著『前世への冒険』は、著者が、自らの前世と名指された人物を追って文献を辿り、その人物が活躍したイタリアへと渡り、彼の真実に迫ろうとする旅の記録である。

「あなたの前世はー」等と言い始めると、何か非常に胡散臭い、安直で依存的なものを予感してしまいそうだが、この書物はそういう種類のものとは一切関係がない。そこに描かれているのは寧ろ、理性に従った慎重で地道な作業の連続だ。それらを重ねる事によって、一歩ずつその人物ルネサンス期の天才、デジデリオ・ダ・セッティニャーノに近づく道が現れてくるのである。

それでは地味で退屈な本なのかと言えば、決してそうではない。一つの読み物としても面白く、こなれた文章にぐいぐいと引っ張られながら、いつの間にか読者も著者の旅に参加し、そうする内にルネサンス期イタリアをほんの少し垣間見て、その時代の空気に触れる事が出来るようになっている。

又、この本に特有の面白さとして、常識では測る事の出来ないところから示された前世の断片が先に存在し、それをどうにかして検証したいという著者の強い思いが旅の形になっていく点を挙げて良いと思う。

資料的根拠は無いが確信に満ちた断片が、まるで光の欠片のように散らばっていて、一つの破線を形作り著者を導く。先行研究や現地図書館にある古文書記録を頼りに、著者はこれを実線化しようと試みるのだが、その中で、幾度となく自分の前世、及び現在の自分の行為に疑いを向けているところが、本作の一つのポイントではないかと思う。

過去と現在、確信と懐疑、その間を何度も行ったり来たりしつつ、著者はその全てを否定しない。そして最後までその間に留まり、問い続けるのである。

旅の終わり、結局は立証し尽くされる事無く、想像と推理によって繋げられた断片を前にして、著者は記している。デジデリオと「出会った」事、そしてそれによって「今、生きている」という感覚を全身で味わったこの旅の道のりそのものが、「本当の宝」であった、と。

時間や空間を旅した後、人は一例え目に見える形では無いにせよ—現在の生を光り輝かせる何かを、無意識の内に手にするのであろう。そして、日常へ戻っていく。その瞬間にこそ、旅という言葉が確かな光彩を放つように、私には思われるのである。

●森下典子『前世への冒険—ルネサンスの天才彫刻家を追って』、光文社 知恵の森文庫、2006年

谷口 佳恵子 文学研究科比較文化学専攻

「旅立ちの季節に—久世光彦『蕭々館日録』—」

春になるとつい手に取りたくなる本があります。
文章の節々に桜の気配を感じさせるからでしょうか。

久世光彦（くぜてるひこ）の『蕭々館日録』（しょうしょうかんにちろく）。

主人公は九鬼さん（芥川龍之介）に淡い恋心を抱く小さな女の子。
わずか5歳である、その女の子からみた家族、
そして九鬼さんをはじめとする大正の文豪たちの日常が、
春の訪れとともに描かれています。

桜の頃になると「引っ越す」と言い出す、売れない小説家の父さま。
お昼寝好きの呑気な母さま。
「蕭々館」と命名された新居に集まる大正の文豪たち。
6歳で頭でっかちの比呂志くん。

主人公の女の子は、彼らの日常生活を観察し、
あれこれ考えるのに忙しい様子です。
それがほのぼのとしていて、また時に切なくもあるからでしょうか。
いつも桜の咲く季節には思い出して読みたくなります。

至福の時は、蕭々館で夜ごとくりひろげられる文学談義の傾聴という主人公。
宴席の片隅にチョココンと座り、
批判の目をキラリとさせながらも、興味津々に聞き入っています。
そんな主人公を通して、大正の文学者たちの日常が、
春の足音とともに描かれています。

桜の時期一

華やかな満開の桜とともに迎える新しい門出、
それは同時に、旅立ち別れの季節でもあります。

毎年見事な桜が咲き誇る岡田山キャンパスは、
今春も華やかな彩りに包まれることでしょう。
桜の季節を前にして、
旅立つ我が身を振り返り、思い出されるのは、
岡田山キャンパス設計者ヴォーリズ博士の
「校舎は生徒の精神経験に影響を及ぼす」という信念です。

花々が四季を告げる素敵なキャンパスで、
精神的な豊かさを養う機会を与えられたことに感謝するばかりです。
また末尾ではありますが、
学生生活を支えて下さった皆様方に、心より感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

光輝く思い出たちを胸いっぱい抱え、旅立ちの時を迎えます。

- 久世光彦『蕭々館日録』中央公論社、2001。(2001年泉鏡花文学賞受賞作品)
(新館2階 図書/0375604/853.3/KU14)

「行間を旅する」

●福永信『コップとコッペパンとペン』 河出書房新社 2007年 1,400円

「行間を読む」という言葉がある。文字に書かれていない作者の真意を感じ取ることが、この小説のアクロバティックな展開を表現するには、寧ろ「行間を旅する」といった方が良い。旅といってもゆったりとした熟年夫婦の国内旅行ではなく、学生が卒業旅行でよくやるヨーロッパ周遊 7日間並みの強行軍、もしくはそれ以上だ。宇宙旅行といっても良いくらい。例えばこんな調子なのである。

「外はすごい風だ」

話しかけられたのだとわかってもしらいいのか判断がつかなかった。うつむいていると、男の子の隣に別の男の子が腰を下ろした。もう言葉を出すことはできなかった。半ば開いた口からため息がもれた。

父を早くになくし、女子校出身、一人娘の早苗にとって男とは、未知なる存在であった。それが近所がうらやむほどの仲の夫婦となった。腹には子どもまでいる。

本の帯には「1行先も予測できない！」とあるが、小説の最後まで、この調子なのである。上記の文章の最後から2行目と最後の行、紙面では隣り合った言葉同士だけれど、その間にどれくらいの時間が流れたのか、早苗と男の子の間にどんな会話が交わされたのか、読者は頭の中で瞬時に憶測し、場面を転換させない限り、この小説を読みきる事はできない。この次のページでは早苗は亡くなっており、夫になった男の子は失踪し、お腹の子どもは父を探している。

時間や常識から無重力になることを試されているような気にすらなる。読み進めながらこのハードな思考訓練の先に著者の真意を見ようとするのだが、一向に見えない。見えなくてもいいのかもしれない。見えても見えなくてもこの際同じなのかもしれない。

ただ、旅に出るのと出ないのでは大きな違いがある。折角行ったのに雨のせいで霧がかかって富士山が見えなければ、多分その人は天気予報をしっかりと確認したうえで、日を改めてもう一度見に行くだろう。たまたま天気予報が大はずれで、またもや富士山が見られなかったとしても、それはそれで良いのである。また行けば良いのだから。

大事なものは富士山であれ、著者の真意であれ、それを見ようと努力したかどうか、ということなのではないだろうか。

<研究室から>

難波江 和英 総合文化学科教授

図書館から、Veritas の「研究室から」というコラムに投稿してもらいたいという打診があった。即レスで承諾。このタイトルを聞いて、こんなことを書こうかなというイメージがつつぎつつぎとわいてきた。しかし、待てよ。これは、どんなことを書くコラムなのだろう。いつもながら、気にしなくてもよいことが気になり始め、とりあえず、サンプルとして届けられた Veritas のバックナンバーをのぞいてみる。同僚たちの「研究室から」というコラムが目に入る。なにになに？ それぞれがそれぞれの「研究」にまつわるエピソードを紹介している。あ〜なるほど、こういうことを書くのが「ならわし」かとなんとなく納得しながら、それではそういうことは書かないで、自分のイメージを遊ばせてみることにしようと思った。そう思えたのは、私がヘソ曲がりだからではなく（それも多少はあるけれど）、これまでの読書と思考の賜物ゆえである！？ あえて言えば、こんな発想の方法や文章の書き方こそ、私なりの「読書」の成果であり、私なりの「研究」の作法にほかならない。

それでは、「研究室から」というタイトルからどんなイメージがわいたというのだろうか。それは、たとえば、部屋の窓から見える四季の移り変わりであり、これまで手にした無数の本の重さに耐えかねた本棚のたわみであり、そこで過ごした学生たちとの呼び戻すことのできない時間の流れであり、いまも内耳の隅のほうで響いているみんなの笑い声であり、彼女たちもってきてくれたグッズ（「おじゃる丸」や「スヌーピー」や「ドラゴンボール」のフィギュアや関連商品）の群れである。つまり、私にとって「研究室」とは、そうした出来事をすべて丸ごと、ちょっとセンチメンタルな気分と共に含んだ現象の総体にほかならない。それは丁度、私たちが「家」と言うとき、物質としての「建物」のことより、むしろそのなかで積み重ねられてきた経験の層から成る「家庭」のことを想像するのと同じである。あるアメリカの不動産会社が、「私たちはハウスではなくホームを売る」と宣伝していたのも、それと同じようなことだろう。

研究室は、このように、そこに集まる人やモノを時間の流れのなかで組みあわせ、結びつけ、編みなおしていく。そう考えれば、研究室というものの自体、それをめぐって複雑にからみあう記憶の糸で織りあげられたテキスト（本）であるとも言える。この「研究室から」という文章もまた、現象学や記号論の入れ知恵をつかった言葉の編みものとして、もうすでに、テキストとしての私の「研究室」の織り目のひとつになろうとしている。

<史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院のスポーツ交流

「明治四十三年二月十二日はしも、世にも珍らしき女軍の戦争日にしてその場を神戸女学院葆光館のバスケットボールグラウンドにとりぬ。これぞ其名も高き神戸女学院バスケットボール選手隊と、大阪梅花女学校の、それとなりき。」（1910年5月28日発行『めぐみ』第50号）

勇ましい掛け声とともに始まりましたのは、今からおよそ100年前の明治時代に行なわれていたバスケットボールの対外試合を知らせる一文です。

神戸女学院は、創立時から、校章の三つ葉のクローバーに象徴される Body, Mind, Spirit を大切にしてきましたが、特に、リベラルアーツ・アンド・サイエンスの高等教育を始めようになってからは、運動にも力を入れています。文科系、理科系、芸術系を総合的に学ぶのがリベラルアーツ教育です。運動というと少し奇異に思う方もあるかも知れませんが、

1890年に同窓会誌『めぐみ』が創刊されましたが、その2号目には勉強とともに運動の大切さを語る学生の文章が掲載されていて、学校で体操や運動がいかに大切に思われていたのかを知ることができます。1893年には運動会が始まりました。この頃は学内ではなく、外に出かけて行って行っていたようですが、テニス、バスケットボールといった球技も早くから取り入れられていて、記録によれば、学内テニス大会が1903年に始めて開催されています。

もちろん、学内だけでなく対外試合も近隣のキリスト教系女学校との間で行なわれていました。今回はその中から、とてもおもしろい臨場感あふれるレポートをお届けしたいと思います。（『めぐみ』の記事は原則そのまま転載するが、旧字は現代字に改め、必要に応じて旧仮名使いを書き換え、句読点等の追加を行なっている。）

このたびの対戦相手は大阪梅花女学校（現在の梅花女子大学）。神戸女学院と同じ組合教会系のミッションスクールです。レポートのタイトルは「バスケットボール競争」、まずレポーターは両校のいでたちを伝えます。

「其の扮立のおもしろかりしは梅花女学校の諸兵にして、老いたるも若きも、皆おなじく大なるリボンをおさげの頭にかざし、足は皆足袋はだしにして、其の着物の白木綿の洋

服の様な襦袢の様な着物の様なものなりき。これに反して神戸女学院は更に優美なるものにして、頭には只一つの飾物もなく、皆三ツ組に編みて後に垂らし、普通の着物に白たすきをあやとり、其の胸にはミスハツキングの手になりし学校の印をば着けたり、袴も梅花女学校の足ののぞいて居るのとは全く異なり、実に優美にして質素なるものなりき、されど其の働振のめざましかりしは見る人をしておどろかさしめたり。」

一番にファッションに注目するところは、今と少しも変わらない乙女心ですね。

「天下未曾有の女軍の出陣とて大阪よりの見物人も実に数多く、梅花女学校の方方をはじめとして、ウイルミナの方々並びに父兄方大阪毎日新聞記者など皆々我先きにと、開戦時にはさすがの広庭も人をもて山をなしたり。」

新聞社まで来るとは、女学生のスポーツ交流が珍しかったということもあるかもしれませんが、かなり世間の注目を集める試合だったようです。ちなみに、ウイルミナというのは現在の大阪女学院のことで、こちらもミッションスクールです。

「両軍のめざましき働は容易に第一の勝負を来たらさず、十数分の後にしてすさまじきとの声あがると聞えしは我が軍の二点を得たるなりき。〔略〕梅花も我負けじと競いし勢に次は続けて梅花四点を得たりき、〔略〕次には又我が軍二点を得たり」

試合のほうは一進一退の攻防が続きます。その後、休憩時間を挟んで、梅花女学校が続けざまに4点を入れます。そして

「見物人の心配に反して、我が諸勇兵の元気さ四点位は直ぐに取りかへすよと、死者狂に働きたる功空しからず、遂に二点を得たときの声の、いまだ絶えざるに、引き続き、又もや二点一点と、実に不思議なるすさまじき入方に九点を続け、最後の計算に我が軍五点の勝利としてめさましき勝負は終を告げたり。」

試合は神戸女学院の勝利で終わりました。新聞社からは記念のメダルが贈られたそうです。

<視聴覚センター近況報告>

林 裕市郎 視聴覚センター職員

視聴覚センターの近況として、下記3つの取り組みを報告させていただきます。

2009年度も、授業等における視聴覚設備の活用支援に傾注するとともに、AV ライブラリーについては教育的価値の高い、かつリラックスできる施設作りに取り組んでまいりたいと思います。

1. LAⅡ-45、S-7、S-34 視聴覚設備の刷新

2009年度前期授業開始までに、標記3教室の視聴覚設備の改修工事を完了させます。3教室とも、他教室の視聴覚設備の水準に合わせ、スムーズな操作性の実現を目指しています。

特にLAⅡ-45については、他の大教室と同様、タッチパネルによる簡単な操作仕様となっていますので、授業のほか、様々な学内行事にご活用いただければ幸いです。

2. AVライブラリー新着ソフトのご案内

教育・学習用教材として、2月・3月中に次の2シリーズ作を大量入荷する予定です。

『シェイクスピア全集』37巻セット VHS BBC 出版

『わたしたちのからだと健康 第2版』13巻セット DVD

医学映像教育センター出版

※キャリアデザインプログラム（ボディ・サイエンス）指定教材

また、今春 TOEFL の最新版テキストを多数入荷し、さらに気軽に英語を学んでいただけるよう、『TOEIC Test プラス・マガジン』『AERA English』など定期刊行英語雑誌を新しく所蔵することになりました。これらは、館外貸出も受け付けていますので、ぜひご利用ください。

ソフトに関する詳細は、AV ライブラリーOPAC 検索、または視聴覚センター職員までお尋ねください。

3. 第2回映画上映会の開催

視聴覚センターでは、昨年10月に学内映画上映会（北極のナヌー他1作）を学生スタッフ“KCU”の協力を得て開催したことを契機に、今後も随時上映会を行っていくつもりです。

学生の皆さんほか参加者の方々が、気軽に楽しめ、かつ学習のきっかけを得られるような作品を上映していきたいと考えています。

第2回上映会は、2009年度前期授業開始後、春ごろの開催を計画しています。詳細が決まり次第、学内ポスターやチラシ等でお知らせしますので、ご期待ください。